



TITLE:

東南アジア大陸部における民族間 関係と「地域」の生成

AUTHOR(S):

高谷, 紀夫; 林, 行夫; 長谷川, 清

CITATION:

高谷, 紀夫 ...[et al]. 東南アジア大陸部における民族間関係と「地域」の生成. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 20: 48-54

ISSUE DATE:

1996-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187594>

RIGHT:

東南アジア大陸部における 民族間関係と「地域」の生成

1. 研究組織

研究代表者：高谷 紀夫（広島大学総合科学部・助教授）

研究分担者：林 行夫（京都大学東南アジア研究センター・助教授）

長谷川 清（岐阜教育大学外国語学部・助教授）

2. 研究のねらい・目的

シャン、ラオ、タイ・ルーをはじめとする東南アジア大陸部におけるタイ系諸族は、他の言語集団に比べ、分布領域が塊状をなして連続する。このことが歴史的に成立してきた様々な政治的単位の同質性と異質性を際立たせており、その比較研究の有効性の根拠をなしている。本研究の主目的は、タイ系諸族を中心に諸民族がそれぞれ帰属する国家、さらには周辺国家の影響を視野に入れた社会・文化複合についての比較研究をとりまとめ発展させると同時に、国境を越えて展開する東南アジア大陸部全体の「地域」の生成論理と民族間関係に関する基礎的な理論研究に寄与することにある。

3. 平成7年度の研究経過

上記の目的のために本年度は、今まで蒐集してきた基礎資料を持ち寄り、具体的な事例を照合することによる比較研究と、研究課題に関する知見を深めるべく、当該地域の他地域で臨地調査に従事した研究者、さらに他の研究分野で現地体験を持つ専門家を積極的に招いて研究会を開催した。特に東南アジア大陸部の非タイ系諸族の研究者を集中的に招いて討議、議論を展開した。本年度は「地域性の形成論理」計画班との合同研究会（テーマは「東南アジアの民族と複合性」）を加えて、計5回実施した。それぞれの研究会の概略は以下の通りである。その詳細は、後述の、4. 研究の成果とフロンティアに譲る。

（第1回研究会）

日 時：平成7年10月7日～8日

場 所：ひろしま国際センター（広島市）

話題提供者およびトピック：

谷口 裕久(神戸大学)

「比較からみたふたつの民族社会～

～ミャオ(Miao)族／モン(Hmong) 族の事例から～」

武内 房司(学習院大学)

「中国史の中の苗族～ “苗” をめぐる諸言説～」

渡辺 佳成(岡山大学)

「コンバウン朝前期の『民族』の認識」

(第2回研究会)

日 時：平成7年12月26日～27日

場 所：長良川国際会議場(岐阜市)

話題提供者およびトピック：

吉野 晃(東京学芸大学)

「ミエン・ヤオ族の移住と民族アイデンティティ」

西井(鈴木)凉子(東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所)

「南タイの村落における実践宗教

～ケーク(ムスリム)とタイ(仏教徒)～」

林 行夫(京都大学東南アジア研究センター)

「最近のタイ研究から」

(第3回研究会「地域性の形成論理」計画班との合同研究会)

日 時：平成8年3月3日

場 所：京大会館(京都市)

話題提供者およびトピック：

速水 洋子(東北大学)

「北タイ・カレン族における『民族』と『文化』の再考

～仏教化の事例から～」

高谷 紀夫(広島大学)

「『シャン文化』と地域性」

(第4回研究会)

日 時：平成8年3月4日

場 所：京都大学東南アジア研究センター(京都市)

話題提供者及びトピック：

川村 清志(京都大学)

「民謡によって表象される『地域』

～民謡研究の相対化をめざして～」

曾 士才(法政大学)

「貴州ミャオ族の民族文化と『現代化』」

(第5回研究会)

日 時：平成8年3月16日

場 所：大阪市立大学文化交流センター(大阪市)

話題提供者及びトピック：

田中 和子(大阪外国語大学)

「パガン朝時代のビルマの仏教」

研究組織を構成する3名は、ディスプリンは異なるが、80年代より東南アジア大陸部の上座仏教圏を中心にそれぞれ隣接する二国以上でのフィールドワークに従事し、国立民族学博物館などでの共同研究会を通じて議論を重ねてきた。平成6年度においてもプレ研究会として「東南アジア大陸部における民族間関係のなかの『民族』と『社会』の動態」を実施し、準備を進めてきた(平成7年1月実施)。

本年度の活動状況としては、研究代表者の高谷は、東京、鹿児島などで資料蒐集と情報交換を行い、研究分担者である長谷川と緊密に連絡を取りながら、共同研究会の立案、運営を行った。もうひとりの研究分担者である林は、京都大学東南アジア研究センター・バンコク事務所にて平成6年度から本年度の前半にかけて勤務し、資料蒐集と現地研究者との交流に努め、その成果を後半の研究会において報告している。

4. 研究の成果とフロンティア

1年間を通じての議論の内容と今後の共同研究の方向性は次の諸点に集約される。

(1) 研究対象の見方、見せ方、見え方

(2) 移動の記憶と民族意識

(3) 「地域性」の意識

(4) 「民族」と「文化」の語り方

個々に総括的に以下に示したい。

(1) 研究対象の見方、見せ方、見え方

本年度の研究会においては、それぞれのテーマにおける分析もさることながら「民族」をめぐる研究者自身の視点が問われた。研究対象をいかに捉えるか、研究する立場をいかに相対化するかなどが共通する問題点となり、その「見方」「見せ方」の脈絡において研究対象の「見え方」を考察しようと試みたのである。

武内房司氏、渡辺佳成氏からは、文献史学の立場から政治権力と「民族」の相互作用に関する研究報告を受けた。具体的には、武内氏は「苗」族の言説を、渡辺氏は、ビルマ王権の論理をテーマとした。それぞれ交錯する記述の存在を確認しながら、民族の呼称と権力の中心による諸民族の処遇をめぐる当事者と記述する主体の意識と相克、さらに「他者を見るまなざし」に依拠せざるを得ない研究の立場が提示された。前者は、「民族」をめぐる実態研究と観念論的研究のふたつのアプローチをいかに弁証法的に批判するかという問題意識につながる。また後者は、フィールドにおいて交錯するさまざまな「まなざし」を今後どう捉えるか、という論点に展開していくと思われる。ここでいう「まなざし」とは、研究者（部外者）のまなざし、「文化」の担い手のまなざし、当事者が他者を見るまなざし、現地研究者の現地へのまなざし、国家のまなざしなどを含んでいる。そのうち現地研究者が自民族を見つめるまなざしは、注目すべき最近の動向である。部外者としての我々の今後の視座の検討が重要な検討課題となる。

(2) 移動の記憶と民族意識

民族間関係をめぐる比較研究として、本年度のテーマの一つとなったのは、現在国境線の両側で生活する人々の移動の記憶とその意識の問題である。谷口裕久氏は、中国のミャオ（Miao）族、タイのモン（Hmong）族の事例から、吉野晃氏はミエン・ヤオ族の事例から報告を行った。移動という行動の軌跡もさることながら、周辺の民族との交渉によって形成されると想定されるアイデンティティが注目される。吉野氏は、この民族アイデンティティといわれるものは、一般に過去志向的な集団アイデンティティであると指摘する。また谷口氏は、帰属するそれぞれの国家におけるマイノリティとしての民族語、民族文字の処遇について言及した。武内、渡

辺の両氏が政治的中心からの周辺民族への記述から出発しているのと対照的に、吉野、谷口両氏は周辺民族の側の記憶と自画像から民族間関係をイメージしている。しかしながらこの二つのアプローチは、単にディシプリンの違いによるものと解するのではなく、その双方あるいは中間において今後の研究は発展しなければならないのである。

(3)「地域性」の意識

西井氏の報告する南タイにおけるムスリムと仏教徒との社会関係の事例は、宗教的価値観の異なる人々の共生状況を浮き彫りにする。宗教的な行動様式は双方の宗教システム内で完結するものではないのである。速水氏は、北タイのカレン族を対象にその宗教変容についてさらに踏み込んだ議論を展開している。タイ国家の行政と仏教界における「山地民族仏教化」のプロジェクト対象地域において、カレン族側がどのように仏教を受容し、自文化、伝統をどのように再検討しているかを、国家のまなざしの中で儀礼システムの変化を軸に分析しようと試みる。高谷氏は、北タイのシャン（タイ・ヤイ）族の守護霊儀礼の変容と多様性を事例として紹介し、民族間関係研究の研究者側のまなざしを整理しようと試みた。曾氏は、中国貴州ミャオ族が国民国家への統合過程において、圧倒的な漢文化のもとで直面する社会変動を観光化などの豊富な事例から考察する。田中氏の報告は、ビルマ古代史におけるパガン朝の仏教の成立に至る過程を文献史学の立場から明らかにしようとした。それぞれが立脚するフィールド、時間軸、視点は異なるが、その地域を領有する国家の存在を意識しながら、南タイ、北タイ、シャン高原、中国貴州、ビルマ中央部という空間の「地域性」を問題としているのである。

(4)「民族」「文化」の語り方

川村氏の報告は、国民文化としての民謡の成立をたどりながら、地域社会における民謡の客体化にせまろうとする。人々の自文化あるいは歴史の語り方の事例として興味深いだけではなく、今まさに東南アジア大陸部周辺で進行しつつある類似する事象の分析において方法論的に参照に耐えるものである。

「地域」には、客観的に規定される地域と、自己認識としての地域があり、また中央に対する周辺というイメージがある。フィールドワークを展開する研究者は、ディシプリンを問わず、国家の存在を意識せざるを得ない。換言すれば、周辺部をフィールドとしていても、国家へのまなざしを抜きにして多様な事象を記述することはできないのである。今後は、力学的な領域における民族間関係研究のアプローチの可能性を探究するべきであろうし、民族の記憶、語り方における要素の「選択」のあり方も注目すべきと思われる。

なお、本年度、当研究組織が母体の共同研究会ではないが、京都大学東南アジア研究センター主催のフォーラムにおいて、「タイ系社会における『自文化』の構築」をテーマに次のような報告がなされた。研究分担者が発表し、しかも研究課題と密接に関係する内容であり、その後の研究会においてそこで行われた議論を十分取り入れたことを付記する。

(東南アジア学フォーラム)

日 時：平成8年3月2日

場 所：京都大学東南アジア研究センター(京都市)

話題提供者及びトピック：

林 行夫(京都大学東南アジア研究センター)

「ラオ人社会に見る『自文化』の構築～担い手とその周辺～」

馬場 雄司(同朋大学)

「タイ・ルー社会にとっての国家と移住

～地域の歴史的想像力をめぐって～」

5. 今後の課題

今後も、研究会を複数回開催し、本年度展開された議論をさらに深めたい。具体的には「民族間関係」研究の方法論的発展、文化を見るまなざしなどのテーマを継続して討議する予定である。また本年度必ずしも十分ではなかった「地域研究」との接合の追求についても考慮するつもりである。最終的には、報告書の取り纏めを行いたいと考えている。

6. 研究業績

☒谷紀夫

「インレー湖のインダー族～ビルマ文化とシャン文化のはざままで～」『季刊民族学』No. 73: 6-25, 1995.

「ビルマ精霊伝説考～コーミョウシン(Ko Myo Shin) の伝承から～」 *Monumenta Serindica* 26: 293-315, 1995.

林 行夫

"Notes on the Inter-ethnic Relation in History: With Special Reference to Mon-Khmer

Peoples in Southern Laos," paper presented at the Seminar on "Ethnic Groups in Sakon

Nakhon" held at Ratchaphat Sakon Nakhon, 3-5 July, pp.1-26, 1995.

「カンボジア仏教の復興過程に関する基礎研究～現地調査報告資料～」大橋久利編『カンボジアの社会と文化～現地調査報告資料～』カンボジア総合研究会(文部省科学研究費補助金国際学術研究), pp. 290-389, 1995.

長谷川清

「美しき『西双版纳』の誕生」曾士才他編『アジア読本～中国』河出書房新社, pp. 295-301, 1995.

「『宗教』としての上座仏教～シブソーンパンナー、タイ・ルー族の仏教復興とエスニシティ～」杉本良男編『宗教・民族・伝統～イデオロギー論的考察』南山大学人類学研究所, pp. 55-82, 1995.